平成20年３月31日

郷土あれこれ　第19号

発行　あきる野市教育委員会　東京都あきる野市二宮350　電話 042-558-1111　FAX 042-558-1560

網代弁天山の棚田

早稲田大学教授・あきる野市文化財保護審議会委員　海老澤　衷

はじめに

棚田とは、山や谷の斜面に作られた田んぼのことです。段々畑に似ていますが、稲を栽培するために水を張る必要があります。そのため、耕地を水平にしなければなりません。段々畑ならば、耕地に若干の傾斜があっても十分に作物を育てることができますが、棚田は湛えた水が保たれるように畦をかさ上げしたり、水が漏らないように粘土による床を作ることも必要です。このように棚田を作るにはたいへんな労力がいるのですが、日本は平野が少なく、山がちな国であるため、九州から東北地方まで水源が確保できるところであれば、広く棚田が営まれてきました。あきる野市においても昭和30年代までは五日市周辺に多くの棚田が見られました。ところが、近年では棚田でのコメ作りにはたいへんな手間がかかるため、耕作されなくなる傾向にあります。一方で、棚田には国土を保全する様々な機能があり、日本の原風景を感じさせる懐かしさ、美しさがあるため、最近では多くの人が注目するようになりました。平成11年には、棚田学会という棚田を分析し、その保全を図ることを目的とする学会も設立され、同じ頃、農林水産省による「棚田百選」などの選定も行われました。平成４年と平成17年の二度にわたって棚田分布調査が実施され、その詳細については、棚田学会の会長を務める中島峰広氏が論文にまとめています。(1)

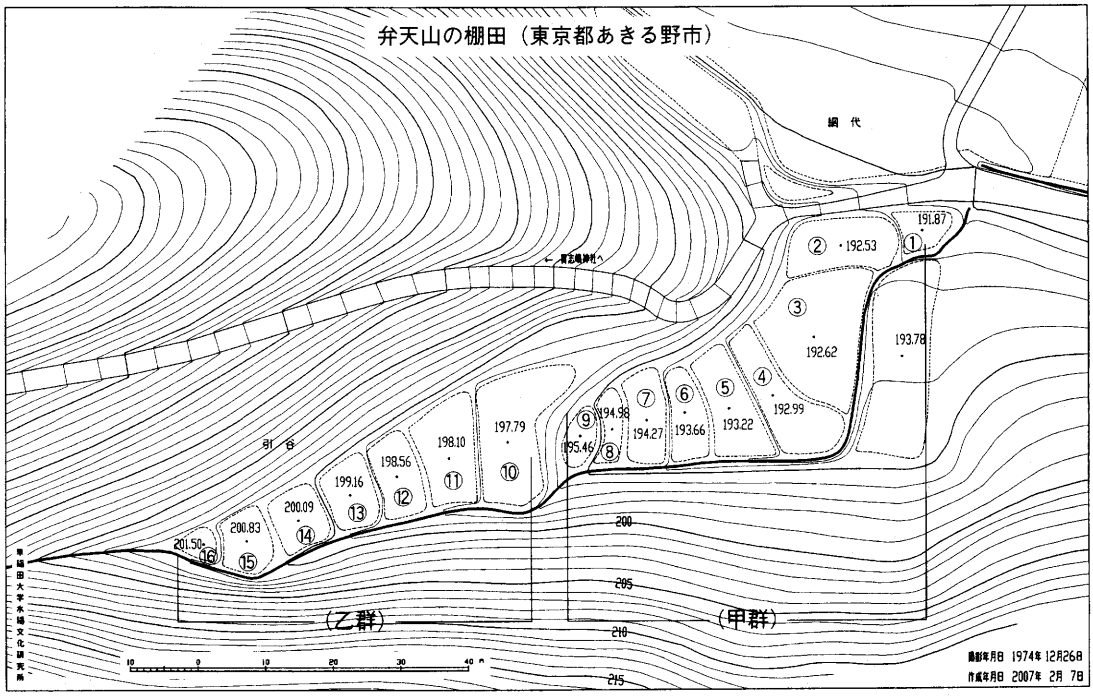

図１　空中写真測量図「弁天山の棚田（東京都あきる野市）」（1974年）

それによりますと、首都圏においても、千葉県・神奈川県・埼玉県では棚田の存在が報告されていますが、東京都においてはゼロとされています。

ところが、あきる野市の大字網代には、れっきとした棚田が存在することが判明しました。以下はその調査を要約したものです。[2]

1　水田の現況

この地はあきる野市大字網代字引谷の117～122番地で、国土地理院が昭和49年に撮影した空中写真に基づいて図面を作成したところ（原図200分ノ1）、全部で16面の水田あるいは水田跡と考えられる平坦面が確認できる（図1参照）。117番地～120番地が①～⑨の面に、121・122番地が⑩～⑯の面に対応する。①～⑨を甲群とし、⑩～⑯を乙群としてそれぞれの斜度を測ると甲群が20分ノ1.238、B群が20分ノ1.565となり、いずれも平成4年に農林水産省が定めた斜度20分ノ1以上となり、棚田と見なして差し支えのないものである。この棚田の近年の状況を語るものとして、「大字網代小字集成図」がある（写真1参照）。旧五日市町が行政の必要上作成したもの

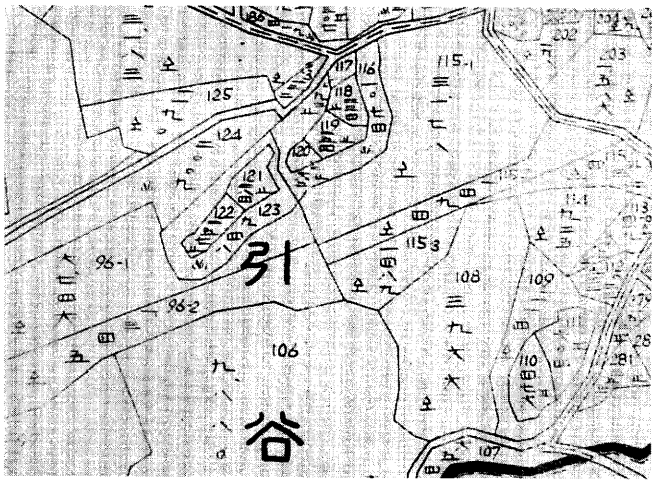

写真1　大字網代小字集成図

で、縮尺を2400分ノ1とし、小字ごとに作成された字図を大字単位で集成したものである。引谷の棚田部分に注目すると、117番地、118番地、119番地、120番地、121番地、122番地は水田表示となっており、116番地、123番地が原野となっている。したがって、最近まで地目の上で水田として扱われていたことはここでも確かめられる。

調査を行った平成17年の時点において、乙群は山林化しており、甲群のみで耕作が行われていた。水田を所有しているのは、網代に居住する野島誠五郎氏で、弟の野島福松氏のお二人から聞き取り調査を行うことができた。①は、近年水田耕作されておらず、空き地となっており、さまざまな作業に使われる。②は、ホーロクと呼ばれるところで、素焼きの平たい土鍋がイメージされるように水持ちが悪く、直ぐ乾燥する。③はオオタと呼ばれ、この地で最も大きい水田で、耕作の中心となっている。④はナガタという細長い水田で水持ちもまずまずである。⑤は水持ちが良く、ここを苗床にした。わずかながら湧水がある。⑥と⑦は水持ちが悪く、⑧と⑨は小さくてこの4枚は水田農耕に適しているとはいえない。②～⑨の水田の合計面積は6畝ほどで籾で7俵ほどの収穫であった。乙群の水田は、岸峯子氏の所有するところで、1980年代には既に休耕田にしたが、水がなく、陸稲を栽培する方が楽であった。水田7枚の合計は5畝ほどで、籾にして3俵の収穫であった。

以上のことから、明らかになったことは、谷田であるにも関わらずあまり用水に恵まれていないことである。南辺に水路があるのだが、常に流水があるような沢とはなっていない。水量がない谷間であったため、河川の状態を示すような浸食はなく、小谷全体を水田化することは可能であったが、それに見合う用水は確保できなかったといえよう。

平成17年の段階で、この地を耕しているのは、自然体験を重視するころりん村幼児園（あきる野市菅生）の保護者の有志の人たちで、子供たちに田植えの体験をさせ、モチ米を栽培し、収穫後はモチつき大会をして、お米のできるプロセスを子供たちに理解させようというものである。所有者の野島氏もこのようなボランティア活動を積極的に支援している。賛同者は30名ほどいるが、実際に耕作に携われる人は10名程度であるという。2005年には、天気が良く、降雨もあって成長は順調であるが、農薬と肥料を使わずに行っているため、いもち病が発生したが、自然治癒したとのことであった。既にこのような形で5年程度継続しており、今後も持続させたいということであった。ボランティアの人たちは西多摩地域一帯に居住しており、ほとんどの人は自動車で20分以上かけてこの地にやってくる。全国的に見て棚田ボランティアとしてはむしろ近距離に属する方かもしれないが、野島氏も高齢で、小規模な水田ではあるが維持していくのは容易ではない。乙群を管理する岸速男氏が語るところでは、網代の北

辺を流れる秋川には大きな堰がかけられ、網代村の対岸にある山田村およびその東隣の引田村には合わせて10町歩程度の水田があり、大きな苦労をすることなく、収穫できたとのことである。

2　棚田としての位置づけ

水資源を供給する視点からすると、棚田は大きく３つの型に分類される。

Ａ型＝長水路型

Ｂ型＝迫田型

Ｃ型＝短水路乾田型

弁天山の棚田はB型に属するものであるが、幸いにも網代賢治郎氏の所蔵する網代文書によって明治以前の状況を伺い知ることができる。

「寛文七丁未年三月二日　武蔵国多摩郡網代村御検地水帳」によれば、寛文７年（1667）に田畑合わせて９町２段４畝25歩とあり、耕地の少ない村であったことがわかる。一番から三六三番まで記され、所在の地字が明らかなものと不明なものがあるが、幸いにも「字引谷」の記載があり、他の資料との照合が可能となっている。詳細は省略するが、「引谷」の地字が冠せられる水田が小規模ながら２箇所存在し、弁天山の棚田の淵源となる水田は少なくとも寛文年間まで遡れるものであることがわかる。しかし、その後の文政12年(1829) ８月「取下場小前帳」では引谷の水田４ヵ所が山崩れにより取り下げられている。さらに明治初年に作成された「検地取調帳」では、寛文検地帳で見られた引谷の２ヵ所の水田は何れも取下地に含まれている。したがって、江戸時代の早い時期に引谷に存在した水田はその地勢故に一旦山林化してしまったものらしい。しかし、旧公図にあるようにその後明治20年頃までには、棚田的な景観となっていたのである。以上のように変遷を追うことができるが、その淵源はどこに求められるのであろうか。この地域の特徴を広く考えてみたい。

3　棚田の歴史的環境

弁天山の棚田群の横には朱の鳥居があり、目を引く存在となっている。この鳥居は網代村の鎮守である貴志嶋神社の参道に立つものである。この神社の祭神は、いわゆる宗像三女神の一神として知られる市杵島姫命であり、明治初年の神仏判然令で明確化されたものであるが、それまでの社号は弁財天で、現在でも一般には「網代の弁天様」として知られている。貴志嶋神社の社殿は、尾根上の削平地に建てられているが（図２参照）、弁天山の頂上には洞穴があり、昭和48年に行われた「網代弁天洞穴発掘調査」によって弥生時代に遡る洞穴信仰が存在したことが

図２　あきる野市弁天山の棚田
〈国土地理院発行２万５千分の１地形図（拝島）〉

知られる。この洞穴には室町時代に成立した七福神信仰がいち早く取り入れられたことで知られ、石造の大黒天像や毘沙門天像などが安置されていた。現在貴志嶋神社境内に安置されている大黒天像は、総高35cm、総幅28cmほどの伊奈石製のもので、背面に「文明九年丁酉閏正月六日」の紀年銘がある。すなわち1477年、弁財天信仰のあったこの地に、七福神信仰がもたらされ、石造神像が彫刻されたのであった。以上のように、もともと洞穴信仰があったところに、弁財天信仰がもたらされ、さらに一五世紀の後半には七福神信仰が取り入れられていたのである。この弁天山の裾野を巡るように、最も西寄りの鎌倉街道が整備され、さらに古甲州街道が東西に走っていたという。

このような地に注目したのが小田原北条氏であった。「網代家文書」（写真２参照）には著名な北条氏の発給文書が２点残されている。一点は、永禄３年(1560) ３月16日の北条家朱印状[(3)]で、北条氏康が当主であった時代のものであり、年貢が銭納から現物納に転換されていくことなど重要な政策を示すものであることが知られている。合計六ヶ条よりなるがこ

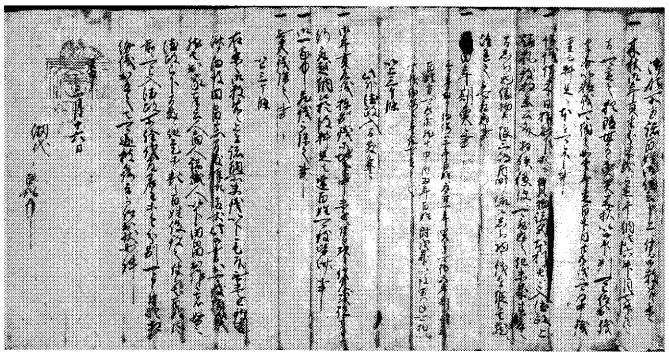

写真２　東京都指定網代文書

こではその第一条に注目しよう。これまで、北条氏の領国においては貫高制が採られ、年貢は銭で徴収していたのであるが、その方針を大きく転換して半分は米納となったのである。則竹雄一氏は、この背景には徳政を求める農民の動きがあり、北条氏がそれに応える形で示した政策であるとしている。[4] 首肯できる指摘であり、結果として農民の米生産に対する意欲（あるいは米生産に向けての農民への圧力）が増すものであったと考えられる。

この「米成」政策への転換が弁天山における棚田開発の契機となったものと推測できる。水田農耕の視点から見れば自然条件が劣悪であるにもかかわらず、開田しなければならない政治的状況が生じたのである。この後、とりわけ網代村に関心を持ったのが、北条氏一族の中でも領国支配に才能を発揮していた氏照である。氏照は、三代目の当主北条氏康の子で、滝山城の城主となり、さらに豪華な御主殿を有する八王子城を造築してここを居城とし、下野国や下総国にまで支配を広げた名将であった。網代の弁天には、別当寺として引谷山妙台寺があったが、『新編武蔵風土記稿』によれば、これは北条氏照が保護した禅宗の寺院で、「寺領五百石、堂塔三十六院」であったという。氏照は、武田信玄による甲斐国からの侵攻を強く警戒し、滝山城の西方にいくつかの枝城を築いたが、その一つが弁天山の西方におかれた城山であった。網代村は、鎌倉街道と武蔵から甲斐に通じる道の交差するところにあたり、氏照はこの交通の要衝に注目したのであった。網代家が所蔵するもう一点の北条氏文書は、天正５年（1577）11月７日北条氏照朱印状[5]で、網代村が小田原北条氏の直轄領から北条氏照領に変化したことを示すもので、氏照が網代村の支配に大きな関心を寄せていたことがわかる。

以上のように、網代村は北条氏照との関係が深いが、それ故に天正18年６月の豊臣秀吉による小田原城攻めに当たって先鋒の前田・上杉両氏が、八王子城攻略の際、網代村を経て南下し、妙台寺は徹底的に焼かれ、破壊された模様である。この時、貴志嶋弁天にあった鐘は奪われ、この鐘が落城後に拾われて八王子の大法寺に納められていたという。[6] 現在この鐘は存在せず、真偽の詳細は明らかではないが、豊臣政権に対する主戦派であった氏照の戦力拠点の一つと見なされて、前田・上杉軍の激しい破壊にあってしまったものらしい。ここでは、小田原攻城戦の歴史的な意味づけを目的とするものではないが、まさにこの弁天山の棚田の周辺が多くの人の行き交う場であったことを確認しておきたい。

おわりに

以上、調査の概要を記しました。２章で、この地はＢ型棚田であることを述べましたが、Ｂ型は中世以来の日本の文化と密接に結びつくものです。棚田の歴史研究に先鞭を付けられた宝月圭吾氏は、それが農民にとっては生命維持装置的な機能を有し、農民が独自に開発し、そこでは農民が自由に処分できる可能性を持つ米を栽培したものであるとしました。これは「棚田の隠田的価値」と名付けることができるものですが、棚田全体を見渡すと歴史的にはさらに広い位置づけができるものであり、弁天山の棚田もその特質を示す一例とすることができるでしょう。

注

（１）「全国市町村別の棚田分布について　―1992年と2005年の比較―」『日本の原風景・棚田』八（棚田学会・2007年）

（２）「東京都弁天山の棚田　―あきる野市大字網代字引谷の事例―」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第五三輯・第四分冊　2008年２月発行

（３）『戦国遺文　後北条氏編』①六二四号

（４）則竹雄一『戦国大名領国の権力構造』（吉川弘文館、2005年）の第二部第一章「後北条領国下の徳政問題―永禄三年徳政令を中心に―」参照

（５）『戦国遺文　後北条氏編』③一九五六号

（６）『五日市町史』二三三頁（五日市町史編さん委員会、1956年）